

富田常雄

武蔵坊弁慶

六

扇の巻



む さいほう べん けい
武蔵坊弁慶(七) 二都の巻

とみ た つね お
富田常雄

© Motoko Tomita 1986



講談社文庫
定価460円

昭和61年7月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 千112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——共同印刷株式会社

印刷——共同印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。(庫一)

ISBN4-06-183799-0 (0)

武蔵坊弁慶 (六)

目次

天南星	七
玉虫抄	四
大將軍禍	七
祝の例	九
灸	二七
討手選び	一四〇
堀川夜討	一六三
苦悶の人	一九二
力ない蛙	二三五
京の夢	二五九

武蔵坊弁慶
(七)

二都の巻

天南星
とらの お

寄せてきた波が一町ほどの先で、ゆたかに盛り上がったとみると、白々と波頭が崩れ、勢い
を増して浜をめぐけて殺到する、その波の先頭に人間の頭がいくつか出て、いっしょになつて
浜をめぐけて寄せてきた。

右から、片岡太郎経春に弟の為春、その真中が弁慶の法師頭で、左が伊勢三郎の郎党の大胡
小吉太であつた。

士気を鼓舞し、暑さしのぎの波乗りである。弁慶は浜の砂で腹をこすり、顔をしかめて水の
中に起ち上がった。上手は駿河生れの小吉太であつた。

「はっはっ、腹をすりむいたわえ」

言いながら、弁慶は浜に立った家人達に笑いかけて逞しい裸像を陽に干した。

「小吉太も、片岡兄弟も巧みなものよ。わしは大きく体が重いゆえ、波の方で乗せかねるて」
伊勢三郎は砂の中に胡坐をかいたまま弁慶を見上げた。

「その筆法ならば、大船は水に浮かぬということになろうよ」

「船と人間を一つにすな。はははは」

「先刻は波に乗りそこねて、しばしがほどはその大頭が見えずであつたぞ、武蔵坊」

「うむ、あの折りは海底にゆき、竜宮に詣でて悪竜の横面を撲って参つた」

「ても、口の減らぬ武蔵坊よ」

「いや、こう暑くては敵わぬ。昨日は下人が二人も霍乱を起こしたゆえ、せめて水にでも入らぬとのう」

そう言いながら弁慶は衣を着た。

「三郎、この腰越の浜の砂はぎらぎらと光るであらう」

「うむ」

「これは砂鉄よ。されば、この砂を焼いて溶かせば、太刀や長巻などいくらでも作れようと申すものだ」

と、弁慶はにやにや笑つた。

「戯れごとよ」

「なんの戯れごとか。汝は馬のことのみに通じて、いかにして太刀、長巻が出来るかも知らぬ」

「また、恥かかすな」

伊勢三郎は苦笑した。

「今日は御難つづきよ、今は砂で腹をすりむき、先刻は陰囊をくらげに刺され、その痛きことはこの世の終りところ覚えたわ」

「わっ、はっ、はっ」

家人郎党達の笑い声が浜の風に送られて、漁夫の苦屋とまやの陰に床几しょうぎを持ち出して涼んでいる義経の耳にもきこえてきた。

弁慶が殊更ことさらにはしゃぎ、盛んに冗談を言う心の苦患くげんを、脇で眺めている常陸坊海尊には充分に察することが出来た。

鎌倉へ入れなかったという一事が、いかに士気を沮喪そそうさせるかを考えて弁慶はあらゆる手段を選んだ。

昼はこうして浜に出てさまざまな遊びをした。海は明るく、人の気持までひろびろとさせることを知っていたからである。そして、夜は万福寺の庭に涼みながら酒を工面くめんしてきて、乱れぬ程度に飲ませ、延年の舞をやったりして賑やかに過ごすようにしていた。

その時、鎌倉へ謀者として出してあった熊井太郎が磯伝いに弁慶の方に近づいてきた。

「帰って参ったか。苦勞であつた」

弁慶は熊井太郎を勞いたわってから、連れだつて波が寄せては引いてゆく渚なぎさを歩いた。

「鎌倉の様子はいかがであつた」

「なにに致せ、この暑さ。一昨日は一条能保殿よしやすは霍乱おしやんを起こされたげにござりました」

「われ等も海などに入つて暑さをしのいでいたところよ」

「前内府御父子は源二位殿げんにいの営中に入つて西の対屋に入られました。前内府は甘縄あまなわより輿こしに召

され、右衛門督はそのまに馬にて進まれましてござりまする」

うなずいた弁慶は、頼朝が宗盛父子を一応礼を以て迎えたことを知った。金洗沢の関というのが、義経足止めのために設けられた仮りのものと悟った弁慶は、自分達をここに残して宗盛父子を送って行った一条能保の後をひそかに追わせたのだったが、これが熊井太郎の報告であつた。

「して、源二位は前内府に会った様子か」

「さ、それまでは眼が届きかねてござりまする」

「うむ」

弁慶は頼朝が宗盛に会うようならば命を助けるつもりだろうと思つていた。しかし、頼朝は会わなかった。重衡の折りはともかくも、今は從二位の高位にある頼朝が、現在無位無官の宗盛に会うのは軽々しいという公文所別当の大江広元の諫言を容れたのであつた。ただ、頼朝は比企四郎にこう慰めさせた。

「頼朝は平家一門に恨みはないが、朝廷の思召しで追討使を差向けた。今、このような辺鄙なところへお出でを願うようなことになったのは申し訳ないが、頼朝としては名誉の至りと思う」この時、宗盛は涙ぐんで命だけはせめて助かり、出家したい旨をくどくど口説いたが、この時、頼朝はすでに宗盛父子を死罪にする肚をきめていた。

「昨日は雷雨がござりまして、久々に夕方は涼しく、源二位には一条能保殿を伴われ、今、木匠の手で建てられておりまする故左馬頭殿の靈廟、南御堂をご覧になられ、親しげに談笑され

夜に入つて御酒宴でござりまいた」

弁慶は黙然ときいていた。

もし妹^{いもうとむこ}聾の能保の代わりに、その場面に義経をおきかえてみたらばと思う。黄瀬川^{きせがわ}の対面の美しさにも優る兄弟の晴ればれた光景ではなかったろうか。怨敵^{おんてき}平家を滅ぼした弟の武勲を賞して共に亡父の靈廟を見て回るだけの寛容を、なぜ頼朝は持てないのであるうか。弁慶は奥齒をかむような口惜しさを覚えずにいられたかった。

「太郎、源二位より腰越になにかの沙汰あるやにはみえぬか」

「その気配はござりませぬ。人もし言えば、今年は暑い、暑いとのみ申して、昼など人の気配もなく大倉の源二位の館あたりも、ひっそりとしてきこゆるものは蟬^{せみ}時雨^{しぐれ}のみでござりまいた」熊井太郎のその言葉から、弁慶は絶望的なものを感じて足元を洗う波に足をまかせながら、しばらく沖の方に眼をやっていた。

「ひと息入れなば、また鎌倉を探り、異変あらば伝えよ」

「心得^{こころえ}候」

そう言うと、熊井太郎は誰れにも会わず磯伝いに遠ざかつて行つた。

暮れなずむ沖を眺めながら、義経は漁師^{とまや}の苦屋の陰に置かせた床几^{しょうぎ}に腰を下ろしてももの思いに沈んでいた。

ひき立てようと努力しても心は次第に沈んでくる。彼は自分の勇武に依つて平家を滅ぼした

のだという自負から脱れることが出来なかっただけ、頼朝の仕打ちがいかにも恨めしかった。こうして荏苒^{じんぜん}として兄からの沙汰を待たねばならない程、自分は悪の材料を持っているのだらうか。

源二位が家人への下し文というのも、義経は読んでいた。官職の如何^{いかん}を問わず、頼朝の口添^{くちぞ}えなくして任官した者は墨俣川^{すまたがわ}以東へ下向したら本領を召し上げ、斬罪に処するといふのだが、すでに彼が従五位下に任ぜられたことは、この下し文の前であり、適用されるとは思わなかったし、また、適用されるなら墨俣川で拒否されるべきであろうと思った。それならば何ゆえにこうして鎌倉に入れようとしなのか。梶原景時^{かじわらかげとき}の讒言^{さんげん}に依^よるのか、それとも伊勢三郎と一条能保の家人との争いにでもこだわっているのであらうか。あれを思いこれと思うと、彼の心は焦燥と苦悶に乱れるばかりであった。

弁慶がゆっくり近づいてきて彼の脇に腰を下ろした。家人郎党達はすでに暮れかかる浜を後にして、三々五々、万福寺の方へ引き上げていた。

「どうやら、涼しく相成りまいた」

と、言い、彼は額の汗^{ひたい}をぬぐった。

「熊井太郎を鎌倉に放ちましたるなれど、別に変りたる様子もなきとのこと」

「うむ、なんのための足留めであらう。九郎は最早^{もはや}堪えられぬ心地が致す。なんとしても源二位のお心の程が知りたい」

「ごもつともなる仰せなれど、今しばし、お待ちあれ」

「武蔵坊にはなにか心当りでもあつてか」

そう問い詰められると彼にも答える術はなかった。彼にも頼朝の肚は読み切れなかった。だが、今までなんの沙汰もないことは、とりも直さず頼朝が義経の存在に冷淡であることを示していた。

義経はゆっくりと起ち上った。

「戻ろう」

うつ向き勝ちに歩き出した義経は二、三十歩ほど歩くと、すぐ後に従った弁慶を振りかえつた。

「武蔵坊、九郎の誠心を源二位に訴えるにはいかにしたものであろう」

「款状を認められまするか」

「うむ。最早、堪えられぬゆえ」

「されば、真心を致すとせば宮中第一の利者、前因幡守大江広元殿に送り、その手に頼るが上分別とは心得ますなれど」

彼が言葉を濁すのをききのがさず義経は足を留めた。

「それも覚束なきか」

「とも覚えませねど、文面によつては、かえつて源二位のお心を悪しく致しまするゆえ、よほどに心配りして書かねばならぬと心得まする」

「誠心誠意を披瀝致せばよかろう」

義経は怒ったように足元の砂を蹴って歩き出した。すでに、海は暮れて、ただ浪音のみが高かった。

境内で夕涼みをかねて相撲を試みていた家人達は夜が更けると共に、それぞれの宿舎に散って行って万福寺はひっそりと静まりかえった。

寺のことで貧しい結び灯台の一つしか置かれていない大方丈の片隅に、義経と弁慶は経机の間にして向かい合って坐っていた。

筆を手にして自分の前に檀紙を展げた弁慶の思い耽けるような表情にも悲壮なものがあつたが、それよりも、若い主の顔には思い詰めたものが刻まれ、灯影の故か十も歳をとった感じがあつた。

いかに話し合い、どのように文面を練ったところで、つづまるところは苦患を訴え頼朝の憐れみを乞う他には書く方法がなかった。辞令巧みの文字をつらねたところで、もとより、それは頼朝を徒らに擧蹙せしめるだけのものであろうと思い、弁慶は容易に筆を下ろすことが出来なかつた。

二刻ばかり、彼は言葉短かに義経と談し合つたきり、むしろ沈思の時の方が多かった。彼の額からは汗が幾たびか流れた。

腰越の浜に寄せる浪音と松籟がかすかにきこえ、ただ賑やかなのは灯台の灯を慕って来る虫の姿ばかりであつた。

「かくては、いつまで過ごしまいても筆を下ろしかねまするゆえ、ともかくも記しまする」

「うむ」

義経は大きく頷いた。

弁慶は静かに息を入れ、それから達筆に筆を運ばせた。

左衛門少尉源義経恐れながら申上候意趣は、御代官のその一に選ばれ、西征の重任に当り、一には朝廷の御敵を滅ぼし、また一には会稽の恥辱を雪ぎ候いぬ。功ありて、正に恩賞にも預かるべきの処、思いの外に虎口の讒言によつて、莫大の勲功を黙止せられ、義経犯すこと無くして咎をこうむり、功有つて誤なしといえども、御勘気をこうむるの間、空しく紅涙に沈む。良薬は口に苦く、忠言は耳に逆うとは先言なり。ここによつて、讒者の実否を正されず、鎌倉に入れられざるの間、素意を述ぶること能わず、徒に数日を送る。この時に當つて、永く恩顔を拝し奉らずんば骨肉同胞の義すでに空しきに似たり。宿運の極わまるどころか、はたまた、先世の業因に感ずるか。悲しきかな。この条、先君の再生にあらずんば、また誰びとか救解せらるるものぞ。事新しき申し状、述懐に似たりと雖も、義経、身体髪膚を父母に受け、幾ばくの時節を経ずして、故左馬頭殿御他界の間みなし子となりて母の懷中に抱かれ、大和国宇多の郡竜門の牧に赴きしより以来、一日片時も安堵の思いに住せず、甲斐なき命を存うばかりと雖も、諸国を流行せしめ、身を在々所々にかくし、辱めを田夫野人に受くること多余……